

鉢花用サルビア新品種「ミライ」シリーズ 3 品種の育成

浅野 正*

岐阜県中山間農業研究所 509-4244 飛騨市古川町是重

Breeding new variety of salvia 「MIRAI」 series for Potflower.

Tadashi Aasano*

*Gifu Prefectural Research Institute for Agricultural Technology in Hilly and Mountainous Areas,
Furukawa, Hida, Gifu 509 - 4244*

摘 要

アキギリとキバナアキギリの交雑により、鉢花用サルビア新品種「ミライパープル (出願番号: 第 34576 号)」、
「ミライブルー (出願番号: 第 34577 号)」、「ミライピンク (出願番号: 第 34578 号)」の「ミライ」シリー
ズ 3 品種を育成した。「ミライパープル」は、白と紫の鮮明なバイカラーの花色、「ミライピンク」は白とピンクのバイ
カラーの花色であり、2 品種ともに鉢物向きのコンパクトな草姿で、開花期は 10 月初旬であり 2 品種は同一作型による出
荷が可能である。「ミライブルー」は、淡い青紫の花色が特徴で、他 2 品種と比較してより矮性であり、開花期が 9 月下
旬とより早生である。これまで登録品種がないアキギリの新品種として、比較的流通アイテムが少ない秋期に出荷できる
耐寒性宿根草の鉢花品種として今後の普及が期待される。

キーワード: アキギリ、キバナアキギリ、宿根草、「ミライパープル」、「ミライブルー」、「ミライピンク」

1. 品種開発の背景

岐阜県内の鉢花産地では、夏期冷涼な気候を活かし、秋の園芸シーズンに出荷できる新たなオリジナル品目の開発が切望されていた。中山間農業研究所中津川支所では、2015 年から県内の山野にも自生が見られる秋咲きのサルビア属のアキギリ (*Salvia glabrescens* Makino) に着目し育種に着手した。

シソ科サルビア属はオーストラリアを除く亜熱帯から熱帯・温帯地域に 900 種以上が分布し、花色のバリエーションと鮮明さから、その多くが観賞用で用いられている (西川綾子, 2012)。国内の花き市場でも苗物として多くの品種が流通し、学校花壇や地域の花飾りの定番品目として親しまれ、特に赤花のサルビアスプレンドゥスが広く普及し馴染みが深い。今回着目し育種親としたサルビア属アキギリ (*Salvia glabrescens* Makino) は山の木陰に生える多年草で、草丈 20-50cm 程度で花色

は紫単色であり、中部、近畿、中国地方の温帯に分布している (北村ら, 1957)。また同じく育種親としたキバナアキギリ (*Salvia nipponica* Miq.) は、本州、四国、九州の温帯から暖帯に分布し、草丈 20~40cm で花色は少々赤みがかかった黄色である (牧野ら, 1961)。

そこで、キバナアキギリのもつ矮小な特徴と新たな花色を併せ持つ鉢花新品種の開発を目指してこれら 2 種を育種親として育種を行い、鉢花に適し花色に特徴がある「ミライ」シリーズ 3 品種「ミライパープル」、「ミライブルー」、「ミライピンク」を育成したので、それらの育成経過と特性を報告する。なお、本研究は「2020 清流の国ブランド開発プロジェクト事業 (2015~2019 年度)」により実施した。

2. 育成経過

(1) 「ミライパープル」、「ミライブルー」

2015年に旧岐阜県中山間農業研究所中津川支所 (岐阜県中津川市千旦林、以下、旧中津川支所) において、キバナアキギリの自殖に

*Corresponding author. E-mail: asano-tadashi@pref.gifu.lg.jp

より10粒の種子を得た。

2016年に播種、養成し開花した個体の中から、分枝が盛んでコンパクトな草姿の鉢物に適した優良な1個体を選抜した。その個体を母本として、花色が濃紫単色の「濃色アキギリ」（山野草業界の流通品種）を父本に用い交配し5粒の種子を得た。

2017年に5粒全てを播種、養成し、開花した5個体の中から、草丈が比較的短く草姿や花付きが優れ、花色が白（上唇弁）と紫（下唇弁）のバイカラーで新規性のある個体と、草丈が極矮性で草姿や花付きが優れ花色が淡い青紫で新規性のある個体の2個体を選抜した。2018年に優良個体を「東濃アキ3号」、「東濃アキ8号」として、挿し木によりそれぞれ10個体に増殖し、特性を調査した結果、両系統とも枯死する株や未開花となる株が無く栽培ロスが少ないことを確認した。

2019年に県内の鉢花生産者の協力を得て現地特性調査を行った結果、高い評価が得られたため、2020年3月23日に種苗法に基づく品種登録を出願し、2020年6月29日に出願公表（出願番号：第34576号、第34577号）された。品種名は、当品種が県内鉢花業界の未来の発展につながることを祈念してミライシリーズとし、花色にちなみ「ミライパープル」、「ミライブルー」と命名した（図1）。

（2）ミライピンク

2015年に旧中津川支所において、キバナアキギリの自殖により得た10粒の種子を得た。

2016年に播種、養成し開花した個体の中から、分枝が盛んでコンパクトな草姿の鉢物に適した1個体を選抜した。その個体を母本として、花色が濃紫単色の「ピンクアキギリ」（山野草業界の流通品種）を父本に用い交配し4粒の種子を得た。

2017年に4粒を播種、養成し開花した4個体の中から、草丈が比較的短く草姿や花付きが優れ、花色が白とピンクのバイカラーで新規性のある優良1個体を選抜した。

2018年にその優良個体を「東濃アキ10号」とし、挿し木により10個体に増殖し、特性を調査した結果、枯死する株や未開花となる株が無く栽培ロスが少ないことを確認した。

2019年に生産者の協力を得て岐阜県内で現地特性調査を行った結果、高い評価が得られたため、2020年3月23日に種苗法に基づく品種登録を出願し、2020年6月29日に出願公表（出願番号：第34578号）された。品種名は、当品種が県内鉢花業界の未来の発展につながることを祈念してミライシリーズとし、花色にちなみ「ミライピンク」と命名した（図1）。

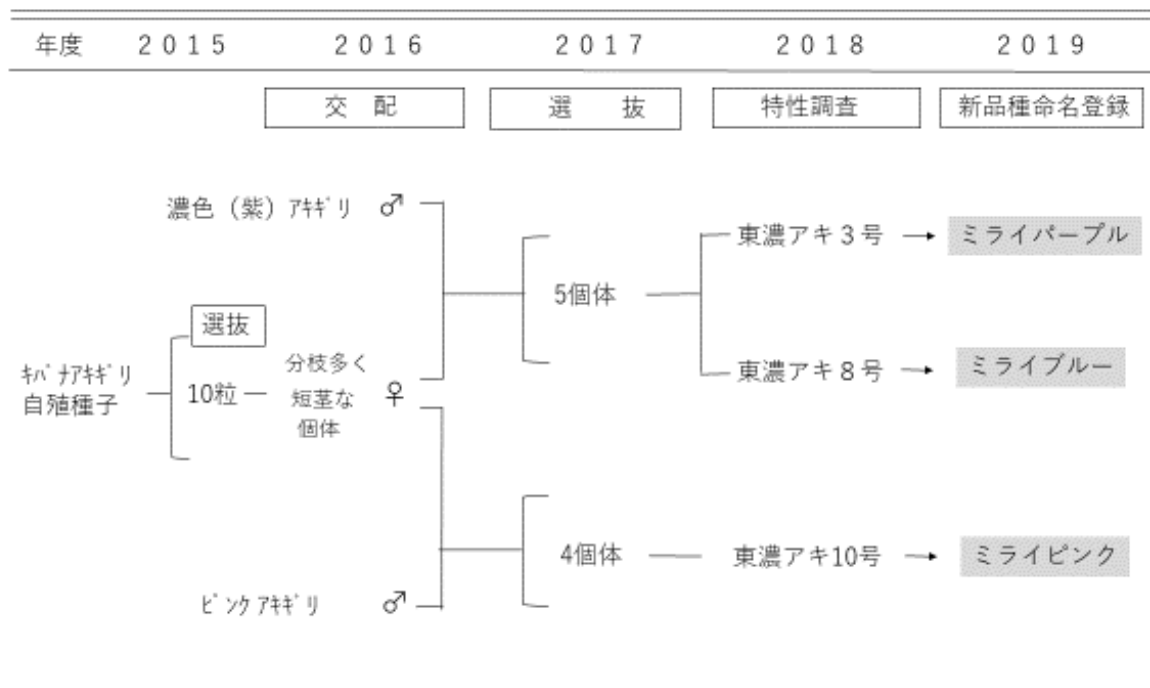


図1 「ミライ」シリーズ3品種の育成経過

3. 品種の特徴

各系統を中山間農業研究所中津川支所（中津川市福岡、以下、中津川支所）の硬質ビニール温室内において、2019年5月9日に挿し木、6月3日に3.5号ポットに仮植、6月30日に5号底面給水鉢に定植し、以降底面給水にて栽培した。同年秋の開花日における特性を、農林水産植物種類別審査基準（サルビア属）に従って調査した。また比較品種として岐阜県のサルビア属の既登録品種「フェニックスパープル」および流通品種であるサルビア属のアキギリ「パープルハート」を同作型、同条件で栽培し比較した。またここに記した開花期については、サルビアの花は小花が穂状に付いた花序が株の中心から放射状に複数伸長し、小花は花序の下から上方向に順に開花するため、開花しているが落花までは至っていない時期（観賞の最盛期）とした（図2）。

（1）ミライパープル

開花期は、「パープルハート」と同じ10月10

日で、それ以外の季節には開花せず一期咲きであった。

草姿は、茎葉の伸長が進むにつれてやや外側に垂れる開張型で、草丈は45cmと今回育成したアキギリの中では最も長く、また花序数が18.1本と多い（表1）。

葉身の基部の形は、切形で、葉身長は8.5cm、葉身幅は6.3cmであった。比較品種の「パープルハート」に比べ大きく、「フェニックスパープル」に比べ葉身長がやや長かった。シリーズ3品種で比較すると、「ミライブルー」より大きく、「ミライピンク」よりやや小さかった（表2、図3）。

花は、小花の大きさを示す花冠の長さが38mmで比較品種と同等、育成品種中最も大きかった。花色は、花冠筒部と上唇弁が共に黄白色、下唇弁は濃赤味紫色と異なる2色から構成されるバイカラーである。ほうの色は暗黄緑色、がくの色は濃黄味緑色で、がくの色が暗灰紫色であるフェニックスパープルとは、花色が異なる（表3、4、図4）。



パープルハート
（比較品種）

ミライパープル

フェニックスパープル
（比較品種）

図2 「ミライパープル」の全体草姿（中央）



パープルハート
（比較品種）

ミライパープル

フェニックスパープル
（比較品種）

図3 花および葉の比較



パープルハート
（比較品種）

ミライパープル

フェニックスパープル
（比較品種）

図4 花序の比較

(2) ミライブルー

開花期は、シリーズ3品種の中で最も早く9月27日で早生である。一方、「フェニックスパープル」は開花が連続的であったのに対し、当品種は一期咲きであった(表1)。また、当



図5 「ミライブルー」の全体草姿



ハートフルハート (比較品種) ミライブルー フェニックスパープル (比較品種)

図6 花序の比較



ハートフルハート (比較品種) ミライブルー フェニックスパープル (比較品種)

図7 花および葉の比較

品種は夏期にも極少数の開花が見られたが、シリーズの他2品種にはこのような現象は見られず性質が異なった。

草姿は、半直立でシリーズの他2品種(開張)とは様相が異なった。草丈は33cm、株幅は36cmでシリーズの他2品種より小さく、小型で矮性品種であった。また、花序数が24.4本/株と比較品種及びシリーズの他2品種より多く、コンパクトで密に花が着生する鉢花に適した特徴があった(表1)。

葉は、葉身長5.6cm、葉身幅4.3cmと比較品種及びシリーズの他2品種と比べ小さく小葉であった。また、葉柄が無く花軸から葉が着生し、他品種とは明らかに異なった(表2、図6)。

花は、花冠の長さが34mmで供試品種の中で最も小さく小花であった(表3)。

花冠の色は、花冠筒部が黄白色、上唇弁がピンク白、下唇弁が浅紫色であり、いずれも薄青系の花色で、白地に薄っすらと青色がカスリ状入るのが特徴である(表3、4、図7)。

(3) ミライピンク

開花期は、「ミライパープル」および「パープルハート」と同じ10月10日で、それ以外の季節には開花しない一期咲きであった。

草姿は、茎葉の伸長が進むにつれてやや外側に垂れる開張、草丈は40cm、株幅は50cmとシリーズ3品種の中では、やや横に広がる特性を持つ。また花序数が16.0本と他2品種より少ないが、花序の長さが37cmと長く花のボリュームがあるのが特徴である(表1)。

葉は、「ミライパープル」と同じく切形で、葉身長は9.5cm、葉身幅は6.3cmと比較品種より大きく、シリーズ3品種中で最も大型である(表2、図9)。

花は、花冠の長さが、37mmと「ミライブルー」より大きく(表3)、花色は花冠筒部と上唇弁が共に黄白色であり「ミライパープル」と共通する。下唇弁は濃赤味紫色と異なる2



図8 「ミライピンク」の全体草姿

色から構成されるバイカラー品種であり、これが品種の大きな特徴といえる。ほうの色は穏緑黄色、がくの色は濃黄味緑色であり、が

くの色が暗灰紫色であるフェニックスパープルとは花色が異なる(表3、4、図10)。



パープルハート (比較品種) ミライピンク フェニックスパープル (比較品種)

図9 花および葉の比較



パープルハート (比較品種) ミライピンク フェニックスパープル (比較品種)

図10 花序の比較

表1 各品種の開花期および開花期における草姿の特徴

品種名	開花期	草姿	草丈 (cm)	株幅 (cm)	花序数 (本/株)	花序の長さ (cm)
ミライパープル	10月10日	開張	45	45	18.1	15.7
ミライブルー	9月27日	半直立	33	36	24.4	34.0
ミライピンク	10月10日	開張	40	50	16.0	37.0
フェニックスパープル*	— ※1	半直立	33	33	14.9	10.4
パープルハート*	10月10日	半直立	35	36	17.5	11.0

* 比較のために用いたサルビア属の流通品種

※1 四季咲き性のため明確な開花ピークが見られなかった

表2 各品種の葉柄および葉身の特徴

品種名	葉柄長 (cm)	葉身長 (cm)	葉身幅 (cm)	葉身の基部の形	葉身の先端部の形	葉身の周縁の鋸歯
ミライパープル	4.5	8.5	6.3	切形	鋭形	浅い
ミライブルー	0	5.6	4.3	円形	鈍形	浅い
ミライピンク	7.2	9.5	6.3	切形	鋭形	中程度
フェニックスパープル*	5.2	8.2	7.9	心臓形	鋭形	浅い
パープルハート*	4.3	6.8	5.0	切形	鋭尖形	中程度

* 比較のために用いたサルビア属の流通品種

表3 各品種の花色

品種名	花冠筒部の主な色*	上唇弁の主な色*	下唇弁の主な色*
ミライパープル	黄白 (2502)	黄白 (2502)	濃赤味紫 (8907)
ミライブルー	黄白 (2701)	ピンク白 (9201)	浅紫 (8603)
ミライピンク	黄白 (2502)	黄白 (2502)	濃赤味紫 (8904)
フェニックスパープル*	濃紫 (8608)	濃紫 (8608)	鮮紫 (8606)
パープルハート*	青味紫 (8310)	青味紫 (8310)	穏赤味紫 (8913)

* 比較のために用いたサルビア属の流通品種

()内はJHSカラーチャート色票により調査した色調番号

表4 各品種の花冠・がく・ほうの特徴

品種名	花冠の長さ (mm)	がくの主な色*	ほうの主な色*
ミライパープル	38	濃黄味緑 (3711)	暗黄緑 (3508)
ミライブルー	34	穏黄緑 (3513)	暗緑 (3707)
ミライピンク	37	濃黄味緑 (3711)	穏緑黄 (2711)
フェニックスパープル*	39	暗灰紫 (8610)	暗灰紫 (8610)
パープルハート*	38	穏赤紫 (9215)	濃黄味緑 (3711)

* 比較のために用いたサルビア属の流通品種

()内はJHSカラーチャート色票により調査した色調番号

4. 今後の方向性

秋に出荷できる県オリジナル鉢花として、サルビア属の「ミライ」シリーズ3品種を育成した。

育成にあたり、アキギリの中でも草丈が低い特徴を持つキバナアキギリを親に用いたことと、草丈の低い個体の選抜により、国内各地に自生するアキギリと比較して鉢花に向くコンパクトな草姿とすることができた。

消費者の鉢花の購買意欲を生む重要要素として、「開花時の豪華さ」がある。サルビア属は一般に縦長の花序に多くの小花が着生し、その小花数が多いことが消費者の受ける豪華な印象に直結するため、今回の育種では分枝数が多く、株当たり花序数が多いことも選抜項目に加えた。その結果、本来山野草として扱われるアキギリであるが、鉢花用園芸品種として玄関先や室内の窓辺で観賞できる品種を育成することができた。

耐寒性についても、冬季は-5℃以下になる育成地の露地圃場で越冬できることから、花壇や庭園に植え付けても、宿根草として毎年秋の開花を楽しむことができると考えられる。

3品種の中で「ミライパープル」と「ミライピンク」は、開花期および形態的特性が類似し、生育の諸特性が揃いやすく同一管理（作型）での栽培が可能である。一方、「ミライブルー」は、他2種と比べさ矮性で、開花期が2週間ほど早いため、他2品種と同時の出荷は困難であると考えられる。そのため、出荷時に複数色で色組みしたい場合は開花期が揃う異なる花色の品種を組み合わせる必要がある。花色の多様性については、アキギリとキバナアキギリの交配後代において、桃・紫・黄色の他、白と桃・白と紫・赤と黄色のバイカラーなどが出現した。鉢花市場では花色のパリエーションがブランド価値向上に繋がる側面もあるため、新たな花色の品種を

めざし育種を継続していく。

また、「ミライブルー」は育苗期間に少数ではあるが開花する場合があるため、そうなった個体は栄養成長時の株の充実が不足するため品質が低下する可能性がある。このため挿し木時期を早めることや充実した挿し穂を確保するなど、花芽分化時期前に十分な茎葉を確保することが必要である。

鉢花生産者の経営面における利点は、栽培期間が中山間地域の主要鉢花であるシクラメンやラン科植物に比べ短いことが挙げられる。3月に挿し木し6～7ヶ月後の9月10月には5号鉢での出荷が可能である。また挿し木の期間に加温が必要なことを除けば、無加温で栽培できる。

サルビアの知名度は、古くから薬用やセージとして香辛料にも利用され、人々の生活に欠くことができない身近な品目であるため認知されている。また近年では、岐阜県が育種し品種登録した四季咲き性の鉢花用品種「サルビアフェニックスシリーズ（三輪・2012）」があり、新たな需要を生み出している。しかしアキギリは、サルビア属の和名がアキギリ属であるにも関わらず一般には知名度が低く、花き市場でも極少量が流通するマイナー品目であるため、今回の新品種により新たな市場開拓を期待したい。また今回育種親としたアキギリやキバナアキギリは日本の固有種であるため、日本の気候風土に適すると共に、海外でも未普及であり新たな品目として需要がある可能性がある。

アキギリにも特性上の課題として、「落花」が挙げられる。サルビアは小花の集合体であり、小花自体の花の寿命は短く、満開時でも初期に先に咲いた小花はがくから離れ落花する。特に輸送中や市場内における落花は商品価値を低下させるため、クレームの対象となることが予想される。その対策として、開花初期の早期出荷や落花防止剤（STS剤）

を用いた落花対策が考えられ、今後の技術確立が望まれる。また、鉢花としてよりコンパクトに仕上げ品質向上を図るための、摘心技術や矮化剤処理などの矮化技術についても検討が必要と考える。

またアキギリの出荷時期を長くするために、育成3品種の組合せによる連続出荷に加え、標高や気候が異なる地域での栽培開始により初秋から初冬までのアキギリ鉢花の出荷拡大を図ることも検討が必要である。こうして市場に鉢花が比較的少ない時期に、アキギリの花色や作型を組み合わせることで、生産者の所得安定と消費者の購買意欲の向上に繋がり、当新品種が今後広く親しまれることを切望している。

謝 辞

本育種を実施するにあたり、現地実証試験に協力いただいた県内鉢花生産者と農業経営課、交配に用いた種苗の提供や品種登録指導をいただいた岐阜県農業技術センター花き部、アキギリ栽培の助言をいただいた水戸市植物公園園長の西川綾子様には深く感謝申し上げます。

引用文献

- 西川綾子.1994.農業技術体系 第9巻:106-4.
北村四郎・村田源・堀勝.1957.原色日本植物図鑑.草本編(上):166-169.
牧野富太郎 牧野新.日本植物図鑑.1961:532.
三輪俊貴.2012.サルビア種間交雑品種「フェニックスシリーズ」の育成.岐阜農技セ研報告.12:10-15.